

早稲田大学

「世界の学生、研究者が学びたいと思える大学を」というのが、Waseda Ocean構想の目的です。この目標を実現させ、ここから輩出される無数のグローバル人材が世界で活躍するために、早稲田大学が意欲的に進めている取り組みについて、橋本副総長にお話を伺いました。



早稲田大学は『スーパーグローバル人材創成支援』事業（SGU）に対してどのような考えをお持ちですか。



SGUを進めることで、近い将来には、早稲田大学にいながらにして、世界中の学生と交流し、世界レベルの研究に触れる経験ができるようになるでしょう。これから詳しくお話ししていきますが、とても意義のある取り組みだと考えています。

本学のSGUについて説明する前に、まず、現在までの大学制度についてお話ししたいと思います。

日本の大学制度は明治以降に完成しました。江戸時代はというと、各藩により、今の都道府県よりも独自色強く統治されており、教育についても各藩の藩校で特色を持った教育が行われていたのです。他藩の藩校に通うことは困難でした。

一方で私塾、つまり現在の私学（私立大学）では、志のある人材を日本全国から広く受け入れ、高等教育を行っていました。

SGUの取り組みは当時の私塾の考え方に似ています。私たち私学は日本全体を視野に入れ、未来に理想を描き、世界を牽引できる人材を育てようとしてきました。その舞台が日本から世界へと広がったのです。

創立当初から世界で活躍できる人材の育成を目指してこられたんですね。

その通りです。早稲田大学の創立者である大隈重信が「一身一家、一国のためのみならず、進んで世界に貢献すべし」と述べているように、早稲田大学ではグローバルリーダーを育成し、地球と人類社会に貢献することを建学の理念としてきました。現在、約5000人の外国人留学生在が在籍し、約3000人の日本人学生が海外への留学や研修に参加しています。この規模を実現できるのは、伝統的に継続して取り組んできたからこそでしょう。

SGU 以前にはどのような取り組みをされていたのでしょうか。

近年では『WASEDA VISION 150』があります。これは創立 130 周年を迎えた 2012 年に、20 年後である 150 周年に向けて、早稲田大学が目指すべき未来のビジョンを定めたプロジェクトです。本学がより世界に開かれた大学となるべく「世界に貢献する高い志と人間力・洞察力を持ったグローバルリーダーの育成」と「世界の平和と人類の幸福の実現に貢献する独創的研究の推進」を軸とし、さまざまなプロジェクトを展開する計画でした。

文部科学省により SGU の募集が始まったのは、翌年の 2013 年でした。『WASEDA VISION 150』との類似点も多かったため、さらにブラッシュアップし、『Waseda Ocean 構想～開放性、多様性、流動性を持つ教育研究ネットワークの構築』として新たな改革をスタートさせました。

構想について詳しくお話を伺う前に、早稲田大学の考えるグローバル人材、グローバルリーダー像についてご説明ください。

グローバルな人物とは、世界中を飛び回るような人物だけを指すではありません。地球のどこにいても、また、どのような仕事に従事していたとしても、目の前の問題を、世界の動きと合わせて、世界全体の構図に落とし込んで考えることのできる人材、広い視野を持った人材だと考えます。

そしてリーダーとは、周りを引っ張っていく人だけを指すのではなく、自分の立場を理解し、役割を果たせる人。そして機会が巡ってきたときにはしっかりと実力を発揮してチームを導ける人のことです。

早稲田大学が 150 周年を迎える 2032 年の未来においては、現状では考えられないような、新しい複雑な地球規模の問題が出現していることでしょう。この対応のためには、自分の専門を活かしながらも、国境の枠組みを超えて、多様な能力・個性・考え方をもった人たちとチームワークを形成して目的を達成していく、そんな柔軟性や適応力も必要になってくるのです。

『Waseda Ocean 構想』ではこのような人物を多く輩出することを目指しています。

『Waseda Ocean 構想』の『Ocean』にはどのような思いが込められていますか。

『Ocean』つまり大洋という地球を覆う大きな海のイメージに、本構想のキーワードである開放性、多様性、流動性のイメージを重ねているのです。七つの海で世界が一つにつながっているように、早稲田大学と世界中の大学が一つにつながり、優れた研究者や教育者、そして学生が世界中の大学間を自由に行き来できる環境を構築したいと考えています。学生や研究者が、あたかも魚が大海原を回遊するかのように、さまざまな地を訪れ、多様な経験を積みながら成長するイメージです。

そして各地で得た経験や知識を後進に伝え、新たな人材を生み出していく、そんな環境でありたいですね。

具体的な目標もあって伺いました。

10 年後の 2025 年に向けて、二つの課題を掲げています。一つは「10 年で 10 万人のグローバルリーダーを輩出する」。そしてもう一つは「10 年で 18 の研究分野を世界ランキング 100 位以内とする」。

この二つの数値目標の実現に向けて、さまざまな具体的取り組みをスタートさせています。

どのような取り組みをされているのでしょうか。



この構想には三つの柱があります。一つは「地球規模の課題の解決と未来を創造する研究・教育システムの構築」、二つめは「教育・研究における徹底的な国際化の推進」、そして三つめは「教員採用システムと大学運営ガバナンスの抜本的改革」です。この三つの柱が結びつき、影響し合うことで、世界に通用する大学へと生まれ変わっていくことでしょう。そして、多くの専門家や先進技術を持った人材が国際的に回遊・交流することで、世界の教育・研究が、早稲田大学を中心として質・量ともに向上していくことを期待しています。

それでは三つの柱、それぞれについて詳しく伺いたいと思います。

一つめの「地球規模の課題の解決と未来を創造する研究・教育システムの構築」とはどのような取り組みでしょうか。

さきほど「10年で18の研究分野を世界ランキング100位以内とする」という目標があるとお話しました。この実現のためにも、まずは世界的に評価の高い学問領域をモデルケースとして、研究・教育システムを先行して構築する取り組みです。

この取り組みでは、早稲田大学のなかでも、世界から研究者や学生を呼び寄せられるであろう6つの学問領域をモデル拠点に選びました。それが実証政治経済学、国際日本学、数物系科学、ナノ・エネルギー材料、ICT・ロボット工学、健康スポーツ科学です。まず、この6拠点で世界ランキング100位以内を目指して活動します。

各拠点には、本構想の目標に直結する、地球規模の課題の解決、世界的な研究拠点の確立、国際ネットワークによる研究者の循環等のテーマが課せられています。ですから必然的に世界中の研究者、学生との交流が生まれ、最適な研究・教育システムが構築されることでしょう。もちろん各拠点で得られた知見・成果は、他の学問領域にも広げていき、10年後には18拠点での世界ランク100位以内を実現します。

各モデル拠点の研究内容については、特設HPで詳しく紹介しています。

<http://www.waseda.jp/inst/sgu/6bases/>

日本にいながらにして世界の最先端の技術や研究を間近に感じられることでしょう。学生諸君がこのような魅力的な環境で専門家や他大学生と交流し、お互いに刺激を受けながら高めあうことを期待しています。

「教育・研究における徹底的な国際化の推進」では、どのような展開をお考えですか。

まず、なぜ教育・研究の国際化が必要かお話ししましょう。

例えば長年続いた研究で新しい発見を生むにはどうしたらよいか、考えてみてください。それまでとは異なる実験や調査、分析などが必要ですね。

このような新しい視点や発想は、多様な価値観、異なる文化がもたらすことも多く、研究者が国際的な環境で切磋琢磨することで得られる可能性が高くなるのです。

日々の学生生活でも同じことが言えます。キャンパスが国際化することで様々な価値観や文化に触れることになり、多様な価値観への理解が自然と育まれます。グローバル人材に不可欠な国を超えて協働する意識を身に着けることもできることでしょう。

早稲田大学では国際化の実現に向け、世界の優れた大学とのネットワークを構築するために、海外と学期の開始時期を近づける「クォーター制」をスタートしました。

各国から入学する学生の受入れ体制として、国内外の学生混在型の「国際学生寮」も整備し、真の国際化を図っていきます。英語で教える授業科目も大幅に増します。

以上の取り組みを展開することで、10年後には10000人以上の留学生の受け入れを実現し、本学からは毎年10000人以上の学生を送り出すことを目標としています。

10年後には現在の二倍の留学生を受け入れ、三倍の学生を送り出す計画なのですね。国内学生の年間留学者数が10000人ということは、ほぼ全員が対象になりますか。

はい、『Waseda Ocean 構想』では「全員留学」を目標に掲げ、全学生が卒業するまでに一度は海外留学を経験することとしています。この実現に向けて、今後3年間で従来の短期・中長期の海外派遣留学プログラムを、質・量ともに拡充する予定です。

また、1ヶ月以上本学に滞在する、中長期受け入れ研究者の数も大幅に増加することで、学部学生たちも海外から来ている研究者たちと接する機会も多くなり、彼らの指導のもとで研究を行う可能性も高くなることが考えられます。

各数値目標が実を結べば、外国人留学生数が全学生の20%である10000人に達しますから、多文化で多様な価値観が融合した、最先端の教育・研究に触れられる世界に誇れるグローバルキャンパスが誕生することでしょう。

三つめの「教員採用システムと大学運営ガバナンスの抜本的改革」とはどのようなお考えでしょうか。

ガバナンスとは組織運営のための仕組みのことをいいます。

前述した二つの柱を実現するために、まず、「教員の国際公募」や「教員の国際流動性」を高めるなど、世界トップクラスの教員を早稲田大学に招聘することに力をいれています。例えば、教員が複数の大学と同時に契約することが可能となる「ダブルアポイントメント」や「ジョイントアポイントメント」と呼ばれる制度を採用します。また、研究・教育活動に打ち込み、より高い成果を上げていけるよう、学部・研究科の業績評価を見直し、褒賞制度の充実を図るなどの改革も推進していきます。

このような取り組みを通じて、2023年には、外国人教員と外国で学位を取得した教員を合わせた人数を、現在の約二倍の1380人へと強化していく予定です。

つまり世界的に著名な研究者が早稲田に一定期間滞在し、教育・研究に携わるという環境が現実のものになります。学生は早稲田大学にいながらにして、世界レベルの研究に触れられる経験ができるわけですから、SGUを進める意義は大きいですね。

最後に高校生にメッセージをお願いします。

SGU 構想によって私たちが生み出したい人材とは、「故郷は日本だけれど、相手にするのは世界だ」と、大きな志を抱き、チャレンジが続けられる力と意欲を持ったグローバルリーダーです。そしてその基礎力をつける場所こそが大学なのです。早稲田大学なら、世界を見て、触れ、知ることができます。それは海外ではもちろんのこと、日本のキャンパスにいても同様です。七つの海が一つにつながっているように、人々の営みは多様性と流動性と開放性に満ち、自由に行き来しながら意見を交わし合うことができます。

そんな広い世界へと泳ぎ出ることを恐れず、未来を自らの手で創りたいという大志を抱く若者と出会えることがとても楽しみです。そしてそんな若者が「世界から憧れられる、未来の早稲田大学」の理想を担ってくれることを期待しています。

インタビューに答えていただいた方



■橋本周司
早稲田大学
副総長

担当業務：学事統括

理工学術院教授。1991 年理工学部助教授、93 年教授。
理工学術院長、理工学部長、理工学研究科長など歴任。